

未来へつむぐ200年物語

100年住宅の歴史から学び、これからの100年を考える。

■古家解体プロジェクト／VOL.2

細田工務店では、住まいづくりを通して地球温暖化の防止に取り組んでいます。低炭素住宅による街づくりや、都市型ZEH（ゼッチ）「ストロングスマート」の供給推進に加え、古い木材の活用にも着目しています。東京西部のとある住宅地に建つ古家の解体もその一環でした。

この古家は江戸期の天保10年[※]より100年以上も現役であり続けた住宅で、単に古材活用の対象ということだけではなく、永く住み継がれる住まいに大切な多くの示唆を与えてくれるだろうという期待を持ち、プロジェクトが始まりました。その記録をお伝えしていくシリーズの、今回は2回目の配信記事となります。

住環境を自給自足していた家。

敷地内に育まれていた、緑豊かな武蔵野の風景。

緑豊かな環境に対して、“武蔵野の風景のような”という修飾がよく用いられますが、古家の敷地内には、まさにそのような樹林が広がっていました。豊かな緑を自宅に有していれば、周辺環境に左右されずに、好環境のなかで暮らすことができます。いま、都内でこの古家と同等の樹林を一軒で保有することは困難ですが、たとえば街区単位でなら可能になる部分もあるでしょう。少なくとも、住環境を整えながら住宅を創造するというコンセプトは、現代にも通じる規範です。



その存在自体がエコロジー。

ただそこに在るだけで、エコロジーだった樹林。

生い茂った樹林は、エコロジーという観点からも有益です。よく、エコロジーを実践する際に大切なポイントとして“持続可能”という要素があげられますが、そこに存在するだけで二酸化炭素を軽減し続ける樹林は、持続性の高いシステムの代表例といえます。ですが、江戸時代とは都市環境が大きく異なり、十分な緑量の確保が難しい現代においては、技術革新でその効果をおぎなっていく流れになっています。住宅においてもエコロジーを意識した機能が様々なに搭載されていますが、その際にもやはり、人が努力し続ける必要があるシステムでは長続きしにくく、ただ住んでいるだけでエコロジーが実践されていくような形が理想でしょう。住宅供給企業として、よりストレスフリーで効果的なエコロジーシステムを考えていく必要があると思います。